



Title	西成に生きるマイノリティの現象学：セクシャルマイノリティの語りから
Author(s)	渡邊, 安奈
Citation	臨床実践の現象学. 2025, 7(3), p. 34-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西成に生きるマイノリティの現象学～セクシャルマイノリティの語りから～

The Phenomenology of Minorities Living in Nishinari:
From the Narratives of Sexual Minorities

大阪大学大学院人間科学研究科 渡邊安奈

I. 序文

大阪市西成区の北部にはあいりん地区と呼ばれる地域がある。あいりん地区は 1950 年代以降の高度経済成長期における建設労働者の需要の高まりにより、多くの日雇い労働者が集まる寄せ場として存在していた。1990 年代以降は、バブル崩壊による景気の低迷により、建設労働者の需要は低下、多くの日雇い労働者が失業し、路上生活者となった。2000 年代以降は、行政や支援団体の働きかけにより、生活保護受給者が増え、あいりん地区は『日雇い労働者のまち』から『福祉のまち』へと変容した。訪問看護や訪問介護の事業所も多く、彼らの生活を支援している（原口他, 2011；白波瀬, 2017）。

現在の大阪市西成区は、高齢化率 39.8%、65 歳以上の単独世帯率 68.1%、要介護認定率 33.3%（大阪市, 2020）であり、生活保護受給率も 21.94%（大阪市, 2022）と高い。

筆者は、あいりん地区で訪問看護師として従事していたが、あいりん地区とその周辺に居住する医療支援が必要な人は、元日雇い労働者、元ホームレス、生活保護受給者、他にも元ヤクザや、精神疾患、セクシャルマイノリティといったマイノリティ要素を持つ人が多かった。

また、あいりん地区では様々なコミュニティやサークルが存在する。独居で家族との縁が薄い人が多いことも影響しているのだろう。その中で、セクシャルマイノリティやアライ¹⁾が参加する『ロカボを食べながら HIV を知る会』が月に一回開催されている。この会は、にじいろケアプランセンターの代表でケアマネジャーの梅田政宏氏（以下梅田さん）と、ちむ訪問看護ステーションの管理者渡辺匡人氏（以下まさこさん）が主催しており、筆者は知人の紹介で 2021 年よりこの会に参加している。

梅田さんは、あいりん地区やその周辺でケアマネジャーとして多くの人々の支援に尽力していた。また、ゲイであることを公表し、自身の受けた差別体験からセクシャルマイノリティの理解を広めるために様々な活動を行っていた。梅田さんは「私たちは性的倒錯者と呼ばれてきた」や「私たちセクシャルマイノリティの多くは自分のセクシャル²⁾に線が引けず、一生何者か答えが出ずに死んでいく」とよく口にし、亡くなる 2 週間前も「ねえ、あんたはセクマイ³⁾じゃないけど、私たちのことを広めてちょうだいよ」と言っていた。まさこさんは、あいりん地区を拠点とした訪問看護師である。トランスジェンダー（FtM）ゲイであり、自身の性転換手術の経験から皮膚・排泄ケアの認定看護師でもある。梅田さん、まさこさんともに友人である。

本論文の語り手である長谷忠氏（以下長谷さん）とは、2022 年に梅田さんの開催した LGBTQ の勉強会で出会った。その後、梅田さんは急逝したが、長谷さんは『ロカボを食べながら HIV を知る会』に参加されるようになった。長谷さんは梅田さんやまさこさんのことを「お仲間」、筆者のことは「お連れ」と呼んでいた。まさこさんによると、ここでの「お仲間」はセクシャルマイノリティ、「お連れ」は女友達を表している。長谷さんと筆者は「じ

いじ」「あんた」と呼び合いながら、「お連れ」となっていった。

筆者自身は、ヘテロセクシャルであり、自分のジェンダーやセクシャリティに迷ったり悩んだことはない。家庭環境と看護師という職種から、女性であることで差別や困難感を抱いたことも少ない。一見、共有できる部分の少ない筆者に彼らは自分の様々な経験や思いを語ってくれた。彼らの持つ様々な経験や思いを「お連れ」として共有してきた。

この論文を書くきっかけとなったのは「僕の話、インタビューしていいで。その代わり僕のことちゃんと論文にして広めてや」という長谷さんからの提案であった。長谷さんは亡くなる直前までご健在だったこともあり、「お連れ」である筆者に看護師やアライとしての直接的な支援は求めてこなかった。それよりは、「お連れ」でありながらも、自分の経験や思いをマジョリティや社会に伝える懸け橋となることを望んだ。

本論文は西成区に住むマイノリティ属性をもち医療支援を受けている人のライフヒストリーに関する研究の一部である。長谷さんもまた、他地域から西成区のあいりん地区に転居したことで、ゲイであることをカミングアウトし、多くの「お仲間」や「お連れ」ができ、自分の願いを持ちながら人生の終末期を過ごして最後を迎えた。誰でも受け入れる地域であるあいりん地区だったからこそ、長谷さんは自分らしく生き抜くことができた。

終末期における患者のニーズに関する先行研究では、慢性呼吸器疾患の終末期患者のケアからその人らしく生きるということを考えた看護ケア（竹川, 2018）や、終末期患者の家族が看護師に求めるニーズ（山崎, 富田, 2022）といったものがあった。また、看護師の支援に関する先行研究は、ACPに関する病院職員の意識調査（鹿角他, 2020）やエンドオブライフケアに関わる看護師の死生観尺度のデータを集めた研究（永山他, 2021）や、訪問看護師を対象にACPのプロセスと支援について聞き取りし、その内容をカテゴリ化したもの（鶴若他, 2016）が研究されていた。また、セクシャルマイノリティと高齢期に関連した先行研究においては、性的マイノリティが抱く高齢期の不安（北島, 杉澤, 2017）や、日本の性的マイノリティの高齢期における諸課題（西村, 2022）、高齢のLGBTQの在宅介護サービスの経験と認識の調査（Smith, Wright, 2021）があり、セクシャリティを開示していくことへの不安がみられた。ゲイ男性のライフストーリーについては地方に生きるゲイの同性愛嫌悪（真野, 2014）、『古い考えの家』に生まれた20代ゲイ男性のナラティブ（田中, 2021）、60歳以上のLGBTQ22名の老化経験に対するインタビューと行った研究（Van Wagenen et al., 2013）はあったが高齢のセクシャルマイノリティの終末期の語りに焦点をあてた現象学的研究はみあたらなかった。

長谷さんの語りは、セクシャルマイノリティが高齢になり、死を意識しながら人生を振り返るライフストーリーである。時代や社会のまなざし、周囲の環境の変化の中で、重なったマイノリティを持つ自身のありかたを変容させ、またセクシャルマイノリティとして終末期にどのような願いを持って過ごしたか、という点について貴重な考察を与えてくれるものである。

II. 研究方法

1. 研究デザインと選択理由

本研究では村上（2013, 2021, 2023）による現象学的質的研究を用いる。

長谷さんは、約1世紀という長い期間を重なったマイノリティとともに生きてきた。そ

して最後の願いの根底には、今までの経験が関与していた。長谷さんの持つ経験は、他者と一緒にしたり比較することはできない独自の経験である。それは、エビデンスや理論と当てはまるではなく、今までの自然科学的な分析で捉えることはできない。

長谷さんと筆者はセクシャリティにおいてマイノリティとマジョリティであり、長谷さんの筆者への要請であった「自分のことを広めて欲しい」という対象もマジョリティに向けてであった。更に、マイノリティの持つ経験をマジョリティが経験していることは少なく、イメージすることは難しい場合もある。そのため、現象学的手法を用いることで、長谷さんの語りを可視化し、マジョリティに伝えていけると考えた。

現象学とは、人間の経験とその背景を、その運動と生成において捉える学(村上, 2013)であり、個人の持つ経験や価値観が持つ個別性のある構造を浮き上がらせることができる。長谷さんがみてきた景色を共にみつめるためにも、個人の内側に視点を取る思考法(村上, 2023)が手がかりになる。そのため、長谷さんの、自分の死と向き合ってきた経験を長谷さんの視点から明らかにするためには、現象学的質的研究が適切であると考えた。

2. 研究協力者

研究協力者は、大阪市西成区（あいりん地区）在住の長谷さん、95歳、ゲイである。独居。香川県のある村で、医師の父親と内縁関係にあった看護師の母親の間に非嫡出児として産まれた。尋常小学校の時に同性愛者であることを自覚する。また、トップの成績でありながらも出自から進学をすることができなかった。50歳代より、ゲイの集まりやデモに、参加する。80歳代後半で西成区に転居する。その前後に、ゲイであることを公にカミングアウトした。普段の過ごし方は、詩を書いたり、歌を歌ったり、LGBTQ や紙芝居のサークルに参加していた。訪問看護と訪問介護を受けてはいたが、ADL はほぼ自立していた。(2024年11月、自宅にてご逝去される。)

3. データ収集方法

インタビューは、本人の同意のとれた2024年3月以降、長谷さん宅で行った。インタビューは非構造化インタビューによる経験の聞き取りを実施した。インタビュー内容としては、過去の経験、現在のこと、現在受けている医療支援などを中心に、自由に語ってもらった。長谷さんと筆者は、2022年から親交があり、「自分のことを広めて欲しい」という長谷さんの願いをもとに、長谷さんがインタビューの形式をとっていない場面での発言もフィールドノートに記載していた。生前、長谷さんに内容を確認し、論文掲載の許可を得ていた。本人の希望で実名公表としている。

4. 分析方法

本論文は、インタビューを使った現象学的研究(村上, 2013, 2021, 2023)の方法を参考に以下のように行った。

インタビュー内容を基に逐語録を作成し、繰り返し読んだ。長谷さんが用いる言い回しや、語りのなかで繰り返される言葉や口癖に注目しながら、長谷さんの伝えたいことを取り出し、その語られ方を長谷さんの視点から分析した。また、長谷さんの経験から社会的・歴史的な背景の抽出も目指した。本文中、長谷さんの語りは太字体とし、補足箇所は()

で示した。筆者が強調したい言葉は [] でくくった。また、引用末尾の【】の数字は逐語録のページ数を挿入した。1回目、2回目はインタビューの回数である。フィールドノートからの引用は、日付を記載した。

5. 倫理的配慮

本研究は大阪大学人間科学研究科 社会学・人間系研究倫理委員会に提出し、承認(2024001)を得て実施した。研究協力者には、研究目的、概要、研究協力の自発性と撤回の自由、個人情報の保護、調査結果を論文発表や学会発表することを、文書を用いて口頭で説明し、承諾を得た。本論文の実名公表者は、本人若しくは親族の承諾を得、あわせて同研究倫理委員会の承認(2025022)も得ている。

III. 分析

1. 繰り返される「安楽死」

長谷さんは、知り合った頃から、自分のことを多くの人に広めて欲しいと語っていた。インタビューへの協力も自ら名乗り出してくれた。ただし、自分が喋ることを必ず論文にして世の中に広める、ということを条件として提示された。長谷さんは1回目のインタビューの終盤に自身の年齢の話をし、そこから「僕の願い」を語りだした。

長谷さん：パパっと安楽死させてくれたらええなど。**安楽死。**

筆者：安楽死したいの？

長谷さん：安楽死ってわしの生涯のあー今、今持ってる夢は安楽死。

あははーって笑て死ぬのがな。病院にも入らんし、けがもでけへんし、それがなかつたら安楽死や。そりや安楽死であんた、(僕は)家族はないやろ？結婚もしてへんやろ？安楽死だけで自分だけあははーと笑て、黙って死ねたらそれほど幸せなことないで。安楽死。皆あんた病気になつたら病院入つて長いこと病気の手当てしてなんかやる人おるけど、あんなこと僕はしない。とにかく安楽死。あははーと笑って死ねたらたらいいと思ってるから。だって僕一人だけやろ。家族も何もないで。そんなこと考えんでもええからな。あははーつとで、安楽死さしたら一番いい。それが僕の願い。安楽死。そんなもうあんた長いこと生きたってしやあないがなー。そんなもうあんた100歳もあんた110歳も生きとると思うけどな。安楽死よ。安楽死が僕の遺言というかあれよ、僕の願い。

うん。ははははは。安楽死がいちばんいい。【1回目：17】

長谷さんは、自分の死に方について話す時、「安楽死」を多用していた。「安楽死」は、薬剤等を用いて意図的に生命を短縮するものであり、現在の日本では認められていない。長谷さんは、「病気になつたら病院入つて長いこと病気の手当てしてなんかやる人おるけど、あんなこと僕はしない」と語っており、積極的な延命治療を行わないことと同義で「安楽死」を使用していた。後日、長谷さんに確認に行くと、従来の「安楽死」の意味も、「安楽死」が日本では認められていないことも知っていた。それでは、長谷さんにとって「安楽死」という言葉は何を意味するのだろうか。この問い合わせを通してマイナリティとして生きた長谷さんの持つ経験の意味を考えることが本論文の問い合わせである。

「安楽死」について語るこの場面では、長谷さんにとっての「安楽死」の意味は複数存在する。語りの冒頭では「パパっと安楽死させてくれたらええなど」他者に「安楽死」を委ねる。他者によって「安楽死」することを希望し、「安楽死」を「夢」と語るも次の語り

では、「あははーって笑って死ぬ」ことが「安楽死」と表現する。「あははーって笑って死ぬ」意味合いの「安楽死」に他者は直接関与しない。「病院にも入らんし、けがもでけへんし、それがなかつたら安楽死」は、長谷さんにとって病気やけがのない、健康な状態が前提となっている。病気やけがで入院してしまうと長谷さんの「安楽死」は叶わないのである。ここには、死ぬ直前まで健康でありたい、病院では死にたくないという長谷さんの思いが現れる。

次に「安楽死だけ」をすることで「自分だけあははーと笑う」と言う。前述では「あははーって笑って死ぬ」ことを「安楽死」と表現していたが、ここでは「安楽死だけ」が、「家族はない」「結婚もしてへん」自分が「自分だけあははーって笑って死ぬ」と「安楽死」と「笑う」の順番が変わり、「あははーと笑て黙って死ねたらそれほど幸せなことない」とも語る。ここからは「病院にも入らん」「家族はない」「結婚もしてへん」自分が、自宅で一人で死んでいくことへの受容がみてとれる。「黙って死ねたら」は、苦しまずという意味合いも含まれるのだろうが、長谷さんは最後に「あははー」以外に何かの言葉を誰かに伝えたり、遺すことは考えていなかったことが推測される。

続いて、「病気になつたら病院入つて長いこと病気の手当てしてなんかやる人おるけど、あんなこと僕はしない」と話す。長谷さんは、自分が意思決定ができない状況下での積極的治療の可能性に対する思いを吐露するとともに、再度、自分が「あははーと笑って死ぬ」「安楽死」を希望していることを表明するのである。そして、「僕一人だけ」「家族も何もない」ことで「そんなこと考えんでもええから」「あははーと笑って死ぬ」「安楽死」を繰り返す。「そんなこと」は遺される家族の思いの尊重と家族を残して死んでいく自分の抱く感情であろう。

ここで長谷さんは「安楽死さしたら一番いい」とまたも自分の死を他者に委ねる。語りの冒頭では「安楽死させてくれたらええ」と受け身で語っているのに対し、語りの終盤では、自分の死を他者の死のように表現する。長谷さんは、『長谷忠』という人間が死ぬとしたら「安楽死」させることが彼にとって「一番いい」と考え、「安楽死」させることが「僕の願い」となっていく。長谷さんが自分の人生を俯瞰し、死に方を決める瞬間であった。

長谷さんにとっての「安楽死」は“積極的治療は望まず、死の直前まで健康で、最後にあははーと笑ってそのまま死にたい”という「願い」であった。長谷さんがこの「安楽死」という「願い」を持った根底には「家族はない」「結婚もしてへん」「僕一人だけ」という背景がある。それは長谷さんが同性愛者であることを始めとする重なったマイノリティ要素を持っていたことが由来している。

ここからは長谷さんがどのような経験を重ねながら生き、筆者へ「安楽死」を遺すことになったのか、長谷さんの人生の語りからみていく。

2. 「女ばっかり」の家庭

長谷さんは、村で一番大きな家に住む医者と、看護師の母親の間に産まれた。医者である父親には家庭があり、長谷さんは、母、姉、弟、妹、祖母、叔母、叔母の娘2人と暮らしていた。この家庭の中で、尋常小学校を卒業するまでを過ごした。

長谷さん：男の友達って言うても、わし1人もいてへんのよ。全部、女の友達よ。そんな生活をして、ほいでなんかちょっとおかしくなったんやな。あつはつは。

僕はでも一、うどん屋のあの一姉ちゃんと妹としょっ中遊んでたから、女の友達ばっかりみたいなもんや。ほんでね、うどん屋の子供二人、ずっと付きおうていたんよ。友達って女ばっかり。男が一人もおらんから。

おばちゃんは、あの一男の、夫というのがあんまり見たことなかった。そのおばちゃんの子どもで、そのおばちゃんの二人の姉と妹もな。だから、その男とか、お父ちゃんとかいう関係とかが全然ないんだよ。それで育つんや。だから、それだから、それだからこんなゲイになったんかなんか知らんけどな。そこがちょっとわからんのよ。しかしほんま女ばっかりやな。【1回目：3-4】

長谷さんは、「女ばっかり」の家庭で育っているが、遊ぶ相手も姉や従妹に限られていた。母親は村で一番大きい家の医者の内縁の妻であったことで、長谷さんの家族は地域住民とも距離があり、祖母や叔母も「お父ちゃんとかいう関係とかが全然ない」ことで地域内のコミュニティが限られていたことが予測される。長谷さんも「男の友達って言うても、わし1人もいてへん」と言っており、男友達はおらず、「お父ちゃんとかいう関係とかが全然ない」こともあり、同性同士の交流は皆無であったのだろう。

長谷さんはこの語りの中で「女ばっかり」を繰り返す。「女ばっかり」の中で生活していくことで「ちょっとおかしくなって」自分は「ゲイみたいな感じになった」のではないかと話す。長谷さんは自分がゲイになったのは環境が理由だと推察する。

次に、家族について語るこの語りの中で、母親と実姉は出てこない。叔母と従妹のことが長谷さんの家庭環境の中心であり、語りの終盤では、叔母の子どもが姉妹であり、そこには父親がおらず、そこで育ったので「こんなゲイになったんかな」と、叔母一家の子どもであるかのような語りへと変容していく。長谷さんの家族についての語りは、「うどん屋のおばちゃん」家族が中心となってくる。ここから、長谷さんは母親や実姉との関係性は薄く、ボーダレスな一種の多様性家族で育ったことがわかる。

続いて、他者と関わってこなかつた人生を、人生後期の転機と共に以下のように語っている。

3. 終わって、捨てて、楽になる

これは、2024年にNGO・MASH大阪の依頼で、大阪市北区堂山町にあるdistaというゲイコミュニティスペースで講演を行った後、自宅に着いたときに語った場面である。語りの冒頭のオナニーの話は講演の中でも話しており、長谷さんが伝えたかったことであったと考えられる。

長谷さん：オナニーが好きで88歳までしょっ中してた。でもな、88歳で何も出なくなつた。そこで僕は終わった。今は幸せ。平和。オナニーをしていた時は、あの人好きなんかな、とか色々考えることが多かった。でもオナニーできなくなったら悩みがなくなつた。平和よ。捨てたら楽になるのよ。はははー。

筆者：それまではしんどかったん？

長谷さん：そりゃあんた、（昔は）あかんことちやうか、同性愛者というのは。あかんのよ、言われへんのよ。セックスは一回もやつたことがないし、結婚もせーへんし、そんなんやからな。皆とちょっと違うねん。普通じやないわな。そういう生涯を歩いてきたからな。（ゲイということを）昔は言われへんかった。自分で、ちょっと、あーおかしいと

いうことは自覚しとったけどな。はっはっは。告白は一度もしたことがない。それは、おかしい。男が女を好きになるなら、そら簡単にできるけどな。(昔は)生き辛かった。ちょっと話すとかができるひん。

筆者：昔な、パレード出たりしてへんかった？50歳くらい？その時にカミングアウトしたん？

長谷さん：あー、デモな。近い人には（ゲイということ）言うたけどな。まあなんか合わんかったな。（長谷さんと当時のデモやゲイコミュニティの参加者は）年が違って。あつはっは。ちょっとずつ誰にでも言うようになったんは、年いってからやな。【フィールドノート：2024年10月26日】

長谷さんが生まれた1920年代は、セクシャルマイノリティへの世間の理解は皆無であった。長谷さんは、この時代の状況を、同性愛者は「あかん」「言われへん」「おかしい」と語っており、同性愛者に対しての世間のまなざしがみてとれる。そして、ゲイということを「言われへんかった」「あーおかしい」と思いながら、好きな人と「ちょっと話すとかができるひん」「告白は一度もしたことがない」という過去を「生き辛かった」と振り返る。告白するどころか、話すこともできない世間の空気感の中で、ばれないように、人と距離をとりながら生きてきた人生は、並大抵の生き辛さではなかつたことが想像できる。

長谷さんが、ゲイコミュニティやデモに参加し始めた1970年～1980年代は、ゲイ雑誌の刊行やゲイ団体の結成といった社会的動向があった反面、HIVの世界的流行による不安から、同性愛者への差別は加速していった。長谷さんは、このような世間の流れの中で、自らゲイのコミュニティやデモに参加していた。

この頃、長谷さんと同じゲイコミュニティに参加していた鬼塚哲郎氏（当時30歳代）は当時の長谷さんについて「長谷さんは、ゲイコミュニティの中で“自分は女性とはセックスしていないきれいな身体よ”と話し、周囲から反発されたことがあった。もしかしたらそれが合わないと感じたのかもしれない」と振り返る。長谷さんが発言した時のゲイコミュニティはフェミニストが多い傾向にあり、長谷さんの発言を女性蔑視として感じた人が多かったようだ。また、1989年の御堂筋でのデモは、エイズ予防法案を通して国家が個人のセクシュアリティに介入することに反対するウーマンリブ系の女性たちが主導し、女性に牽引されてのデモであったと鬼塚氏は振り返る。

のことから、長谷さんは自分のジェンダーやセクシャリティに揺れながらも、男性は女性よりも上、という一種のマジョリティ規範を持っていていたことがうかがえる。同性愛者の権利について、社会的な動きがあったように、女性の権利についても声が上がるようになってきたこの時代のまなざしにも翻弄されていく。そして、より所として参加したゲイコミュニティでは、自分の意見が反感を買うことになる。また、ほとんどが20歳～30歳代であり、50歳代の自分は「合わない」と感じ、再び人と距離をとる生活に戻っていく。

そんな長谷さんに転機がやってくる。冒頭にある、オナニーができなくなったことである。長谷さんは、同性愛者で「セックスは一回もやったことがない」「結婚もせーへんし」「皆とちょっと違う」「普通じゃない」自分が社会に受け入れられない現実に直面し、オナニーをすることでそのネガティブな感情を手放してきた。それと同時に、自分が抱いた思いを相手に伝えたり、周囲に相談したりすることができない中、「あの人好きなんかな」という感情を抱えながら生きていくための方法だったのだろう。

オナニーができなくなったことで「そこで僕は終わった」と語る長谷さんは、自分の今までの「色々考えることの多かった」人生に、一旦線を引く。その直後、「今は幸せ」「平和」と話し、オナニーができなくなった後の人生を表現する。続けて、「捨てたら楽になる」とも明言する。意図的に捨てたわけではないが、オナニーができなくなったことで、自分のジェンダーやセクシャリティの迷いも必然的に手放すことになったのだろう。そして、オナニーを手放さざるを得なくなった時、「あの人好きなんかな」という答えの出ない問い合わせが「なくなった」。長谷さんは“オナニーをすること”からも「自由」になっていった。「捨てたら楽になる」の対象は、“ジェンダーやセクシャリティの迷い”や“オナニーをすること”だけではなく、伝えたくても伝えられず、答えの出ない「あの人好きなんかな」という恋愛感情であった。ここからは、過去の長谷さんが異性愛規範によって自由に恋愛することが困難であったことがみてとれる。

また、この語りの中で長谷さんが「あっはっは」と笑う場面が3回ある。それぞれ「捨てたら楽になる」「おかしいということは自覚」「年が違って(合わなかった)」という言葉の後に笑っている。長谷さんの人生の時系列で考えてみると、“ゲイであることが”「おかしいということは自覚」しており、ゲイである自分を否定していたことを笑う。“同志を求めてゲイのコミュニティに参加するが”「年が違って」合わず、再び他者と関わらない生活に戻っていくを選択した自分を笑う。“加齢でオナニーができなくなり、様々な悩みや思いを”「捨てたら楽に」なった自分を笑う。これらは、長谷さんの人生において変化せざるをえなかつた場面である。それが積極的に選んだ変化ではなく、社会のまなざしや周囲の環境、加齢という自分ではどうしようもない変化であり、必ずしもそうしたかったわけではないことが読み取れる。自分の人生を回顧しながら、その時に抱いた様々な思いが去来していたことが「あははー」につながったのだろう。

次は、長谷さんがオナニーができなくなり、異性愛規範から「自由」になったことについて語っている場面である。

長谷さん：男でも女でも僕はいい。気なんかつかってへん。世の中に囲いをせず生きた方がいい。それが自由や。自由。フリーダム。1人1人生き方が違うことをわかっていてればいいのよ。男や女や縛られて生きるのは違う。フリーダム、自由やで。フリーダム、自由主義。それが一番いいねん。【1回目：18】

「囲いをせず、生きた方がいい」「縛られて生きるのは違う」は、長年、ジェンダーやセクシャリティに囲いをされ、迷いながら、縛られて生きてきた長谷さんが現されている。そして、何度も繰り返される「自由」と「フリーダム」は、そう生きたかった感情がみてとれる。

長谷さんはオナニーができなくなったことで、ジェンダーやセクシャリティの迷いを手放し、「男でも女でも僕はいい」と呼称やマジョリティからのラベリングからも解放される。更に、自分自身や社会からのまなざしとも決別し、「自由」で「フリーダム」になっていく。「自由」を手に入れ、「男や女に縛られず」生き生きと自分の思っていることを「気なんかつかわぬ」語っていく。

4. 同じゲイだからこそ受け入れた医療や福祉

出来る限り他者と関わらないように生きてきた長谷さんは長らく医療や福祉のサービス

を受けることを拒否してきた。足腰が弱くなり、掃除や買い物代行等の介護サービスをすすめられても受けていなかったが、90歳を目前にケアマネジャーの梅田さんと出会う。偶然にもオナニーをやめた時期と同時期であった。

梅田さんは、40歳代後半の時、当時の職場でゲイであることをカミングアウトした。その後、上司からの無視が始まり、退職を余儀なくされた。梅田さんは自身の経験をセクシャルマイノリティに対して無関心や偏見を持つマジョリティに伝えたいと、マスメディアも含めて様々なところで発信していた。長谷さんは、自身の差別体験を語る梅田さんに心を開き、医療や福祉サービスを受けるようになる。梅田さんもゲイの先輩として長谷さんに寄り添っていた。

そんな中、2022年に梅田さんが急逝する。梅田さんの死について、長谷さんは様々なところで「自由に」「気なんか遣わずに」語り出す。これは、梅田さんが急逝した後に開催された『ロカボを食べながらHIVを知る会』の終了後に長谷さんが私に語ったことである。

長谷さん：あんた、梅田さんともお連れやったなあ。わしもあの人にはお世話になったんよ。

筆者：そうやんな。

長谷さん：そうそうそうそう。ほんま、あの人死んで腹が立ったわ。あの人言うから来たのに。

筆者：うーん・・・

長谷さん：なんでこんなにはよ死んだんやって。56歳やで死んじゃったん。ほんま腹が立つ。

筆者：そうやんな。めっちゃ若かったもんね。

長谷さん：あの人な、毎日毎日電話くれたんよ。朝。「薬飲みましたかー」って。そんな人おれへん。毎日やで。なのに先に死んだ。腹立ってんねん。【フィールドノート2022年8月18日】

梅田さんは、長谷さんに、毎朝の内服確認の電話をはじめとする様々な支援を提供していた。長谷さんは、訪問介護や訪問看護のサービスを受けており、必ずしも梅田さんが毎日電話しなくとも内服確認はできたが、二人はケアマネジャーと支援対象者という枠を超えて、共に社会のまなざしに苦しみながらも生きてきた「お仲間」であった。

また、長谷さんは、自分の終の棲家にあいりん地区を選んでいた。あいりん地区は、マイノリティの多いまちであり、長谷さんの持つマイノリティ要素が周囲から突出しなかつた。更に、必要以上に他者について詮索しないというあいりん地区の持つ地域性も長谷さんを追い詰めることがなかったのだろう。さらに、あいりん地区で働く支援者もマイノリティ要素を持っていることが多く、支援対象者を、そのまま受け止めて関わることができる支援者が少なくない。梅田さん以外にも、理解のある支援者達の存在と、あいりん地区という地域の持つ特殊性が長谷さんを開いていった。

次いで、長谷さんは、梅田さんの死について、あらゆる場所で「腹が立つ」と表現していた。それは、長谷さんが亡くなる直前まで変わることはなく、話している時は、険しい表情の時が多かった。「腹が立つ」は、怒りを表現する言葉である。長谷さんは、この語りの中で3回「腹を立てる」のだが、最初は、梅田さんが「死んだ」ことに腹を立てる。次に、「はよ死んだ」ことに腹を立てる。最後は、自分より「先に死んだ」ことに腹を立てる。

一見、同じ「腹が立つ」のように見えるが、語るごとに「腹が立つ」理由がクリアになっていく。それは、梅田さんに生きていて欲しかった理由へと近づいていくのである。そして、繰り返される「腹が立つ」は、梅田さんに看取って欲しいという思いを手放さざるをえなくなったことを表しているのである。

5. 「普通ではない」を知ってもらう

梅田さんがケアマネジャーとなり、長谷さんは、訪問看護や訪問介護のサービスを受けるようになった。様々な人が長谷さんの家に訪問するようになり、必然的に他者と関わる環境になっていく。長谷さんに、訪問看護師に求めるこ_トとを聞いた時の語りがある。

長谷さん：看護婦・・・やっぱり看護師さんには、僕がゲイなことを知って欲しい。こ_ういう人間といふことを知って欲しい。

筆者：何で知って欲しいと思うん？

長谷さん：そりやあんた、ゲイなことを隠して話していたら、話がおかしくなるし、本当のことが話されへん。話がおかしくなる。普通の男性と思って接されたら困る。だから、僕は自分から皆に話す。知って欲しい。知った上で関わって欲しい。

筆者：今來てる看護師さんやヘルパーさんはじいじがゲイって知ってるん？

長谷さん：知ってるやろ。言うてるしな。あんな、やっぱり僕らは自分からゲイなことを言わなあかん。言わなあかんと思うわ。【2回目：1】

長谷さんは開口一番に、「ゲイなことを知って欲しい」と話し、「知って欲しい」を繰り返す。そして「ゲイなことを隠して話していたら話がおかしくなる」「本当のことが話されへん」と理由を語る。これは過去の長谷さんが思っていたことなのだろう。

更に「普通の男性ではない」と話す。ここで、「普通の男性」はヘテロセクシャルであり、セクシャルマイノリティは「普通ではない」という、長谷さんの持つマジョリティ規範が顔を出す。しかし、長谷さんはここではマジョリティに対してゲイであることを隠すことにはしない。過去の長谷さんは、社会のまなざしや自身の持つマジョリティ規範からゲイであることは秘匿の対象であった。梅田さんを始めとする人間関係やあいりん地区の持つ特性といった周囲の環境の変化がきっかけとなり「僕は皆に話す」「知って欲しい」とゲイであることは自己開示の対象となっていく。

ここで、一度だけではあるが「やっぱり僕らは自分からゲイなことを言わなあかん」とセクシャルマイノリティへ呼びかける。長谷さんは、ジェンダーとセクシャリティの迷いを捨て、「自由」を獲得したことや、梅田さんの生き方が後押しとなり、ゲイであることを隠さなくていい、「普通じゃない」ことも受け入れるという長谷さんからの「僕ら」へのメッセージが滲んでみえる。長谷さんは、この語りで自分がゲイであることを客観視して語る。マジョリティの持っているかもしれない差別心と、自身の持つマジョリティ規範をはらみながら、自らマジョリティとのジェンダーとセクシャリティの違いを区別して、「言わなあかん」と自分と「お仲間」に言い聞かすかのように繰り返す。このように、長谷さんの人間関係は自己開示することで始まっていく。そして、長谷さんは、看護師やその他の対人援助職に、自分は普通の男性ではない、と思っていることを「知って欲しい」「知った上で関わって欲しい」と考えている。

6. 人生最後の伴走者

晩年の長谷さんは、「自由」に「気なんか遣わずに」生きた。ゲイも梅田さんの死も自分の死も受け入れているような印象を抱かせていた。しかし亡くなる2週間前に、最期の最後の願いを語り出した。前述にあるdistaでの講演の後、介護タクシーで私と2人きりになった時、堰を切ったように梅田さんの話を始めた。

長谷さん：梅田さんに会いたい。Aさん(現ケアマネジャー)も本当によくしてくれる。優しいし、細かいことも気にかけてくれる。でもな、ゲイじゃないやろ。やっぱり最後は梅田さんがいい。最後はゲイの人に看取って欲しい。【フィールドノート：2024年10月26日】

ここでは、長谷さんの「梅田さんに会いたい」という願いが溢れ出し、前述の梅田さんに長く生きていて欲しかった理由が鮮明になる。その後、すぐに現ケアマネジャーであるA氏の関わりに不満がないことを話す。長谷さんのA氏への感謝と気遣いが見える。そして、改めて「最後は梅田さんがいい」と最期の最後を願う。長谷さんが梅田さんが亡くなつてからも看取つてもらうことをずっと願っていたことがわかる。

そして、「最後はゲイの人に看取つて欲しい」と語る。長谷さんは、『ロカボを食べながらHIVを知る会』以外のコミュニティにも参加していた。周囲にはAさん以外にも多くの支援者がおり、セクシャルマイノリティの人もいた。長谷さんは、過去にゲイのコミュニティでわかり合えなかつた経験を持たつからこそ、長谷さんの人生に心を寄せ、お互いの思いを共有してきた梅田さんに看取つてもらうという願いが生まれた。それは、重なつたマイノリティ要素や時代の流れ、社会からのまなざしに翻弄され、他者と関わらず、多くの希望を持つことが困難であった長谷さんの人生最後の願いであった。そのため、この「ゲイの人」は、梅田さんであり、梅田さんが長谷さんにとって人生最後の伴走者であったことがわかる。

長谷さんは、この講演の2週間後に、ご自宅でご逝去された。病院にも入らず、けがもせず、長いこと病気の手当てをすることもなかつた。それは、梅田さんが亡くなった後に望んだ長谷さんの「安楽死」であった。

IV. 考察

本論文では、長谷さんの語る「安楽死」を手がかりに、約1世紀を生きた長谷さんの人生を概観してきた。結果、以下が明らかとなつた。

一つ目は、長谷さんは、時代や社会からのまなざしにより、自分の在り方を変化させざるをえなかつたということである。長谷さんの生まれた時代はセクシャルマイノリティはタブーであり、ひたすら隠し、好きな人に好きと言ふこともなかつた。50歳代には、ゲイコミュニティの開催やデモに参加するが、フェミニズムや男女同権という社会の流れの中、自分と同じ感覚を共有する「お仲間」は見つけられず、再び周囲と距離をとる生活となる。2000年代に入ると、少しずつLGBTQへの社会の関心は高まりをみせ、当事者たちも声を上げ始める。2011年以降、セクシャルマイノリティをカミングアウトした議員が地方や国會議員に当選する。2015年には、東京都渋谷区では日本で初の同性カップルを結婚と同等関係と認める『渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例』が可決し、同年にはパートナーシップ宣誓制度も開始される。その後は全国各地で同性婚訴訟が起き、議

論がなされ、2023年にはLGBT理解増進法が施行された。(中西, 2017; e-GOV, 2023) このような時代の流れは長谷さんに追い風となり、少しづつ周囲へカミングアウトを始めていった。

二つ目は、あいりん地区という地域が長谷さんのマイノリティ要素の意味づけを変化させていったことである。長谷さんは香川県のある村で非嫡出子で生まれ、血縁関係はあるが精神的なつながりのうすい家族から人間関係は始まった。同じ村に住みながらも会ったことのない実父、一緒に住みながらも、家族の語りの際に中心とならない実母。ムラ社会である田舎の村で、男性不在の家庭で育ったことで周囲との交流も少ない環境であった。重なったマイノリティ性は、長谷さんに同性・異性の友達を作ることを阻み、姉と従妹だけが遊び相手というコミュニティの狭さを強いた。

しかし、あいりん地区というマイノリティの多い街に転居したこと、長谷さんの持つマイノリティ要素が差別の対象ではなく、一個性になっていく。あいりん地区にある様々なコミュニティには、重なったマイノリティを持つ人が多く参加する。彼らもまた、長谷さんとは違う形ではあるが、社会からのまなざしに傷ついたり、翻弄され、他地域では生き辛さを抱えてきた過去を持つ人が多い。支援者も、そういった彼らを理解するよう努め寄り添おうとする。あいりん地区は、誰でも受け入れるという風土を持っており、居住する地域の支援スタイルによって、生きやすくも生きにくくもなることがわかった。

三つ目は、梅田さんをはじめとする「お仲間」ができたことで、長谷さんが思っていることを話せる場所が生まれたことである。長谷さんが同性愛者を自覚したのは尋常小学校の時であったが誰にも相談せず隠して生きてきた。長谷さんにとって梅田さんやまさこさんは、かたちは違うが、時代や社会のまなざしに傷つき、苦しんだ「お仲間」であった。そして、彼らは自分の思いを長谷さんに語る。長谷さんもそれに呼応し、自分の伝えたいことや知って欲しいことをマジョリティに向けて「自由」に語り出した。長谷さんは、周囲の人を「お仲間」「お連れ」とわけていたが、梅田さんやまさこさんを「お仲間」と言うのは、ジェンダーやセクシャリティだけではなく、生きてきた経験によっても「お仲間」と表現していたことが示唆された。信頼できる「お仲間」がいて、思っていることを話せる場所ができたことで、自分らしく生き、最後の願いを持てるようになった。

長谷さんに限らず、セクシャルマイノリティはセクシャリティやジェンダーの迷いを抱えながら生きている。現在、セクシャルマイノリティに対し、社会の寛容性は拡大している(石原, 2013)。しかし、一部では過激なヘイトスピーチもみられ、まだまだ十分な理解とは言えず、生き辛さを抱えている人は多い。マイノリティの迷いや生き辛さを、マジョリティが全て理解することはできない。しかしそれは、逆も同じである。全てを理解する必要はなく、必ずしも何かをすることを前提にすることもない。それよりも、お互いの理解できないことも含め、忌憚なく話し合えることこそが、自然に理解や支援へと繋がっていくのである。

注釈

- 1) 性的マイノリティのことを理解し、支援しようとする人のこと。
- 2) 梅田さんの発言のまま記載している。
- 3) セクシャルマイノリティの略。

利益相反の開示

本研究において利益相反は存在しない。

【引用文献】

- e-GOV 性的指向及びジェンダー・アイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律 <https://laws.e-gov.go.jp/law/505AC1000000068> (2025年12月10日 最終アクセス)
- 原口剛, 稲田七海, 白波瀬達也, 平川隆啓 (2011). 釜ヶ崎のススメ, 洛北出版.
- 石原英樹 (2013). 日本における同性愛に対する寛容性の拡大, 相関社会科学, 22, 23-41.
- 鹿角昌平, 木下貴司, 松村真生子 (2020). アドバンス・ケア・プランニングに関する病院職員の意識と実践の状況, Palliative Care Research, 15(3), 251-258.
- 北島洋美, 杉澤秀博 (2017). 性的マイノリティが抱く高齢期についての不安, 老年学雑誌, 8, 51-66.
- 真野豊 (2014). 同性愛嫌悪の内面化とクローゼットの不在と間一地方に生きるゲイのライフストーリーの考察から一, 地球社会統合科学研究, 1, 71-80.
- 松葉祥一, 西村ユミ (2014). 現象学的看護研究 理論と分析の実際, 医学書院.
- 村上靖彦 (2013). 摘便とお花見, 医学書院.
- 村上靖彦 (2021). 子どもたちがつくる町一大阪・西成の子育て支援, 世界思想社.
- 村上靖彦 (2021). ケアとは何か, 中央公論新社.
- 村上靖彦 (2023). 客観性の落とし穴, 筑摩書房.
- 永山弘子, 小笠原知枝, 対中百合 (2021). エンドオブライフケアに関わる看護師の死生観の構造: 看護師の死生観尺度の開発とその検証, 日本看護科学会誌, 26, 296-304.
- 中西絵里 (2017). LGBT の現状と課題—性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動きー, 立法と調査, 394, 3-17.
- 西村圭司 (2022). 日本の性的マイノリティの高齢期における諸課題の整理, ライフデザイン学研究, 18, 341-359.
- 大阪市 生活保護の状況 <https://www.city.osaka.lg.jp/fukushi/page/0000086901.html> (2025年12月10日 最終アクセス)
- 大阪市 大阪市の要介護認定率、サービス利用等の現状について(区別版) [https://www.city.osaka.lg.jp/fukushi/cmsfiles/contents/0000222/222750/200929_04_siryou4-1\(1-13\).pdf](https://www.city.osaka.lg.jp/fukushi/cmsfiles/contents/0000222/222750/200929_04_siryou4-1(1-13).pdf) (2025年12月10日 最終アクセス)
- 白波瀬達也 (2017). 貧困と地域, あいりん地区から見る高齢化と孤立死, 中央公論新社.
- Smith R., Wright T. (2021). Older lesbian, gay, bisexual, transgender, queer and intersex peoples' experiences and perceptions of receiving home care services in the community: A systematic review, International Journal of Nursing Studies, 118.
- 竹川幸恵 (2018). 終末期患者がその人らしく生きるための看護ケア, 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌, 27(3), 280-284.
- 田中将司 (2020). 『古い考えの家』で生まれた20代ゲイ男性のナラティブ, 九州大学総

合臨床心理研究, 12, 41-46.

鶴若麻理, 大桃美穂, 角田ますみ (2016). アドバンス・ケア・プランニングのプロセスと具体的支援—訪問看護師が療養者へ意向確認するタイミングの分析を通してー, 生命倫理, 26(1), 90-99.

Van Wagenen A., Driskell J., Bradford J. (2013). “I’m still raring to go” : Successful aging among lesbian, gay, bisexual, and transgender older adults, Journal of Aging Studies, 27, 1-14.

山崎美智子, 富田幸江 (2022). 終末期患者の家族が看護師に求めるニーズー患者自身が望む「その人らしい最期を過ごすために」という視点からー, 31(4), 433-422.

Abstract

This paper aims to phenomenologically describe the life experiences of Mr. Tadashi Hase, based on his reflections on "euthanasia" shared with me, his female friend. Hase's narrative, which reveals how a sexual minority navigated the end-of-life stage while enduring a shifting societal gaze since childhood, is crucial for understanding and supporting minorities.

Hase was born as a non-legitimate child and raised in a female-dominated household with little connection to his biological parents. He became aware of being gay during elementary school but lived in seclusion, avoiding social interactions. In his fifties, he participated in gay communities and demonstrations but felt out of place and returned to a life of solitude.

In his later years, he moved to the Airin district, met care manager Masahiro Umeda, accepted long-rejected medical and welfare services, and began to deepen his interactions with various people. Subsequently, he strived for Umeda to witness the end of his life, but Umeda passed away unexpectedly. Subsequently, Hase articulated his death as "euthanasia," entrusting it to others and letting go. Although Hase spent most of his life concealing his homosexuality and avoiding social connections, in his later years, he began to come out and adapt to the changes in society and time.

Moreover, within the unique context of the Airin district, the minority identities he possessed were not seen as targets of discrimination but became part of his individuality, illustrating that the ease of living varies by region. Furthermore, the presence of "companions" like Umeda provided Hase with a sense of belonging and enabled him to harbor final wishes for his life. Many people cannot fully understand the confusion and struggles of minorities, his case illustrates that creating relationships and sharing thoughts fosters understanding and support.

要約

本論文は、重なったマイノリティを持つ長谷忠氏が、女友達の私に語った「安楽死」の語りをてがかりに、人生の経験を現象学的に記述することを目的とする。重なったマイノリティを持ち、幼少期から時代や社会のまなざしに揺れながらも、セクシャルマイノリティが人生の終末期とどのように向き合ったかという長谷氏の語りは、マイノリティへの理解や支援に意義がある。

長谷氏は、非嫡出子として生まれ、実父母とも縁の薄い女性ばかりの家庭で育つ。小学生の時にゲイであることを自覚するが、ひたすら隠し、他者と関わらないように生きてきた。50歳代ではゲイのコミュニティやデモに参加するが、周囲と合わず、再び人と距離を置く生活となる。晩年に、あいりん地区へ転居し、ケアマネジャーの梅田政宏さんと出会い、長年断っていた医療や福祉サービスを受け入れ、様々な人々と交流を深めていった。その後、梅田氏に人生の最後を看取って欲しいという願いも生まれたが、梅田氏が急逝する。その後は、自分の死を「安楽死」と表現し、他者に委ね、手放していった。

長谷氏は、人生の大半をゲイを隠し他者と関わらないように生きてきたが、晩年は自らカミングアウトするようになり、時代や社会の変化に自分の在り方を合わせてきた。また、あいりん地区という地域の特殊性から長谷氏の持つマイノリティ要素が差別対象ではなく、一貫性となり、地域によって生きやすさが変わることもわかった。そして、梅田氏をはじめとする「お仲間」ができたことで、居場所ができ、人生最後の願いを持つことができた。マジョリティがマイノリティの迷いや生き辛さを全て理解することはできないが、本事例は、思っていることをお互いに話せる関係作りが理解や支援につながっていくことを示している。